

草原と都市を往還するノマド： 20世紀モンゴル国における居住地と職業選択

風戸真理

目次

- 1 はじめに
- 2 調査地・調査方法
- 3 ライフコースと居住地
- 4 夏季休暇中の移動
- 5 牧畜生活も都市生活も
- 6 おわりに

1 はじめに

20世紀以降のモンゴル国の社会は、統計学的なマクロな視点からみれば、地方の牧畜地域から首都ウランバートル市をはじめとする都市の定住地へと人口が移動する過程であったといえるだろう。これに対して本稿は、人類学的なミクロかつ長期的な視点で、モンゴルの人びとの生活空間と人生経験を分析する。そして、現代モンゴルの人びとによる居住地選択と職業選択の特徴を明らかにする。

モンゴル高原は長く遊牧民の世界であったが、この百年間で大きな変化をとげた。モンゴル人は1921年の人民革命以降、社会の近代化を進め、政治・経済・社会的な機能を備えた都市を発達させた。牧民は原則として、社会主義的な牧畜協同組合の組合員になり、組合の家畜を預かって管理する賃金労働者になった（風戸 2006a）。牧民の子どもたちは、定住区で寮生活を送りながら初等教育を受け（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-1: 421-425）、とくに男子は2-5年間の兵役につくことで（娜仁格日勒 2010: 148）、人が多く集まって営む定住的な生活に親しみ、都市の工業部門で働く工場労働者になっていった。ある者は、近代的な中等・高等教育を受けて、さまざまな分野の専門家として全国の都市や牧畜地域で働く知識人となった（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988-2: 224-226）。

小長谷は、20世紀モンゴルの社会変化を特徴づける社会主義的な近代化の具体的な現象の第1に人口増加を、第2に都市化をあげている（小長谷 2003: 3-4）。モンゴルは1924年からは「モンゴル人民共和国」として社会主義的な経済・社会発展を進めてきた。国の総人口は革命初期の1935年に約74万人であったのが、1979年に約2.2倍の約160万人に、社会主義モンゴルの最後の年にあたる1989年には約2.8倍

の約204万人に（Wikipedia | モンゴル人民共和国 2013）、そして1990年からの民主化・市場経済化への移行の過程でも人口は増え続け、2012年12月の国勢調査では約3.9倍の約287万人を記録している¹⁾（Zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar 2012）。

増加した人口は主に労働者として都市に吸収された。都市化率、すなわち総人口に占める都市部に住む人びとの割合は、1969年に44%であったのが年々増え続け、2010年には67.9%に達した（同上）（図1）。モンゴル国の首都であり、国内最大の都市であるウランバートル市の人口推移は、1910年に約6万人であったものが（Tangad 1987: 243）、1989年には約9倍の約55万人に（Mongol Ulsyn eronhiilogchiin tamgyn gazar, Shinjileh uhaany akademiin hariyaa 2011）、2012年には約21倍の約129万人に増えている²⁾（niisleliin zasag dargyn hureguulegch agentlag, arhivyn gazar 2013）。

以上から、モンゴルの人口増加と都市化は、短期間に大きく変化していて劇的であるといえる。モンゴルをはじめとする北・中央アジアの社会主義諸国では建設業がめざましく発展したが、それでも急激な人口増加に住宅供給が追いつかないことが問題となっていた（風戸 2013: 100-102）。モンゴル独自の工夫としては、遊牧民が草原で使ってきた移動式住居「ゲル」を定住区に持ちこむ形での住宅供給がおこなわれてきた（滝口 2013）。

他方で、地方すなわち牧畜地域内での人びとの移動と居住地選択に注目すると、1年のなかで季節によって春営地・夏営地・秋営地・冬営地などを使い分ける移動をおこなうのに加えて（風戸 1999, 2006b: 7-9）、世帯の発展サイクルのなかで草原と定住区を行き来する移動パターンがみられた（風戸 2002）。そのキーとなるのは子どもの通学である。地方の人びとは、社会主義期と体制転換以降をとおして、子どもが幼い時には草原で子育てと牧畜を営み、子どもが6～16歳の学齢期に達すると

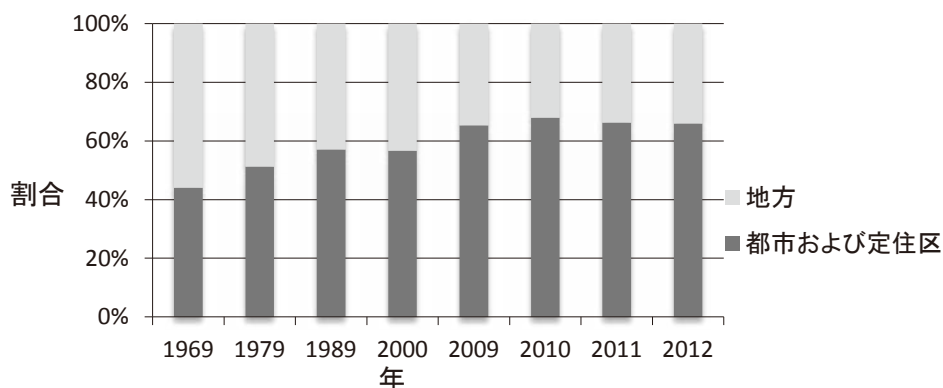


図1 都市化率の推移

家族で定住区に移動し、子どもが大きくなると再び草原で牧畜に専念する、という長期的な移動をおこなっていた(同上)。さらにいえば、家族メンバーの成長段階が異なる親族や知人どうしが協力して、子どもや家畜を預受託しあうことで教育と牧畜を効率的におこなう工夫や(風戸 2006b: 14)、ひとつの世帯が草原と定住区に分かれて、草原では父が牧畜に従事し、定住区では母と子どもが教育するなどの家族内分業(風戸 2002: 70-71)のさまざまなバリエーションを筆者は1990年代以降のモンゴル国で広く観察している。

本稿は、ミクロかつ長期的な視点で、1910年代から2013年に生きてきた人びとの、草原と都市をまたがる移動と生活経験のあり方を議論する。分析にあたっては2つの時間の単位を設定する。すなわち、個人のライフコースと、世代をこえた大家族のファミリー・ヒストリーである。個人と家族の時間は、世帯の発展サイクルに関与することで結びついている。

結論を先取りしていえば、彼らのライフコースとファミリー・ヒストリーはともに、草原と都市の両空間を往還するものであった。20世紀モンゴルでは急激な近代化・都市化が進められてきたが、そこに生きる諸個人と家族は、地方から都市を一方向的に指向してはこなかった。彼らは、草原と都市を包括した広域的な空間を生活空間とし、人生のさまざまな段階で牧畜業や専門職を含む多様な経験を積んだマルチな能力をもつ人びとなのである。

2 調査地・調査方法

本稿のもととなるデータは主にモンゴル国ボルガン県ボガト郡ハン・ジャルガラント行政区およびウランバートル市(以下、「ウランバートル」とする)(図2)で2013年8月25日~9月13日に調査をおこなって得られたものである。

ハン・ジャルガラント行政区は、首都ウランバートルから北西に約420km、エルデネト市から約35km、ボガト郡の中心地から約17kmのところのところに位置する。これらすべてのルートはアスファルト舗装された道路であり、都市へのアクセスが良好な地域である。

ボルガン県公式ウェブサイトによれば、ボガト郡(以下、「ボガト」とする)は約3000平方kmの行政領域であり、3つの行政区に分かれている。海拔は1856~2069mであり、地形は山がちで、植生は森林性草原(ハンガイ)が発達している。気温は夏季に31°Cまで上がり、冬季は-24°Cまで下がるうえに降雪が多い。2012年現在の人口は1848人、世帯数は620戸である。家畜の総頭数は約7万頭であり、そのうちわけはウマ9%、ウシ13%、ヒツジ45%、ヤギ33%である(Bulgan aimag 2013)。

エルデネト市(以下、「エルデネト」とする)はモンゴルの3大都市のひとつであ

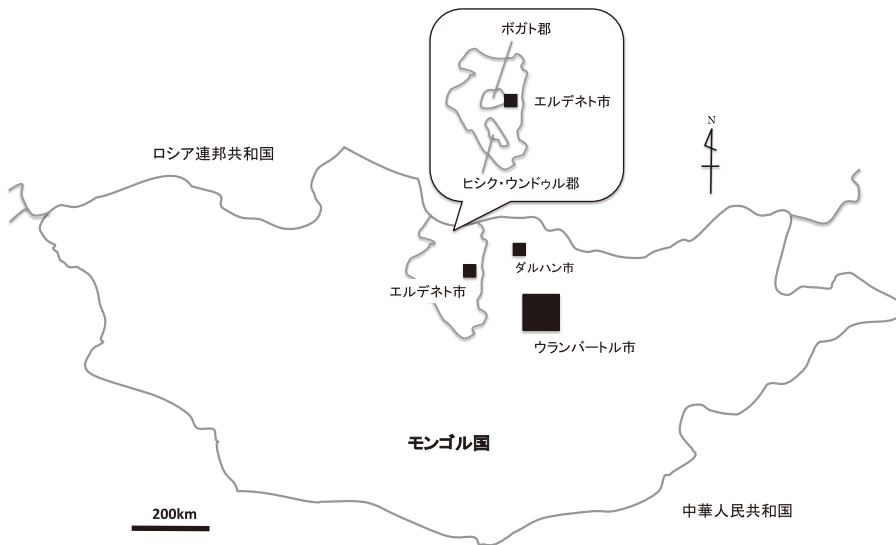


図2 調査地の地図

る。とはいえ、エルデネトの人口は2012年現在、約9万人であり³⁾ (Mongol Ulsyn eronhiilogchiin tamgyn gazar, Shinjileh uhaany akademiin hariyaa 2011)、ダルハン市（以下、「ダルハン」とする）とともに小規模である。これに対してウランバートルの人口は2012年現在、約129万人であり (Niisleliin zasag dargyn huregiuulegch agentlag, arhivyn gazar 2013)、首位性指数は14.3と高い⁴⁾。エルデネトの歴史は、Wikipediaによれば、1978年にモンゴルとソ連の2政府間の契約によって「エルデネト」工場が設立され、都市建設が始まった。主要産品は銅とモリブデン鉱石である (Wikipedia | Эрдэнэт 2013)。

調査対象は鉱山都市エルデネト近郊の牧畜地域ボガトに暮らす2I (62歳、女性)とその拡大家族である (図3)。各個人には、世代を表す数字と個人を表すアルファ

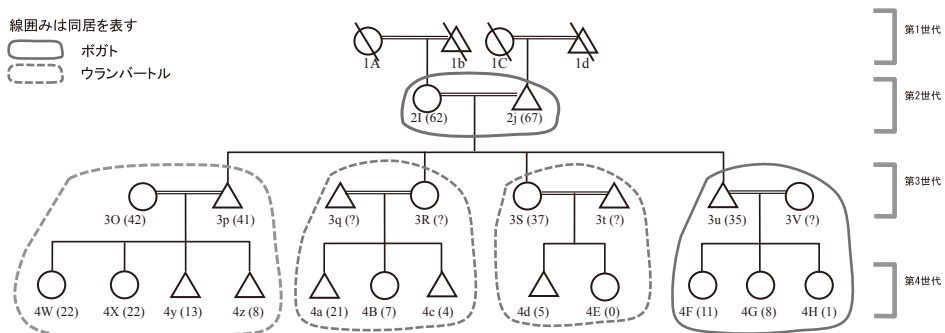


図3 2Iの拡大家族とその本拠地

ベットを組み合わせた個人記号を付した。アルファベットの大文字は女性を、小文字は男性を表す。調査方法は、ライフヒストリーの手法により長いタイムスパンのデータを得るとともに、これを人類学的な微視的な直接観察の結果と照らし合わせながら精緻化した。具体的には、1910年代から2013年に生きてきた一家族の4世代にわたる26人の100年史を聞き取りと観察により調査した。基礎的な聞き取りの項目は、生まれ育った場所・教育を受けた場所・仕事の経験・定年退職後の生活である。

3 ライフコースと居住地

2Iとその家族26人が人生のさまざまな段階で住んだ場所が、一部の者については断片的ではあるが、わかった(表1)。

個人の一生をつぎの5つの人生段階に分けて示す。すなわち、(1) 子ども期、(2) 学校期、(3) 大学期、(4) 中年期、(5) 定年後、である。なお、(1) 子ども期はおおむね0～5歳で就学前の時期とする。(2) 学校期はおおむね6～15歳のあいだで、初

表1 家族メンバーの人生段階と居住地

No.	個人記号	年齢	居住地									
			(1) 子ども期		(2) 学校期		(3) 大学期		(4) 中年期		(5) 定年後	
			春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏
1	1A	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
2	1b	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
3	1C	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
4	1d	故人	○	○	○	○	n.d.	n.d.	○	○	■DH	○
5	2I	62	○	○	○	○	■UB	○	■DH/EN	○	○	○
6	2j	67	○	○	○	○	■UB	○	■DH/EN	○	○	○
7	3O	42	○	○	○	○	■UB	○	■UB	○	—	—
8	3p	41	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	—	—
9	3q	n.d.	■UB	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	n.d.	■UB	○	—	—
10	3R	n.d.	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	—	—
11	3S	37	■DH	○	■DH	○	■UB	○	■UB	○	—	—
12	3t	n.d.	○	○	n.d.	n.d.	■UB	n.d.	■UB	○	—	—
13	3u	35	■DH	○	■DH	○	■UB	○	○	○	—	—
14	3V	n.d.	○	○	○	○	■UB	○	○	○	—	—
15	4W	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	外国	外国	—	—
16	4X	22	■DH	○	■UB	○	■UB	○	■UB	○	—	—
17	4y	13	■UB	○	■UB	○	—	—	—	—	—	—
18	4z	8	■UB	○	■UB	○	—	—	—	—	—	—
19	4a	21	■UB	○	■UB	○	■UB	○	—	—	—	—
20	4B	7	■UB	○	■UB	○	—	—	—	—	—	—
21	4c	4	■UB	○	—	—	—	—	—	—	—	—
22	4d	5	■UB	○	—	—	—	—	—	—	—	—
23	4E	0	■UB	○	—	—	—	—	—	—	—	—
24	4F	11	○	○	■UB	○	—	—	—	—	—	—
25	4G	8	○	○	■UB	○	—	—	—	—	—	—
26	4H	1	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—

○牧畜地域、■都市
 UB：ウランバートル、DR：ダルハン、EN：エルデネト
 n.d.：不明

等・中等教育機関に通学している時期である。(3) 大学期はおおむね16～20歳である。(4) 中・壮年期はおおむね21～55歳の生産活動に従事する時期である。(5) 定年後は老齢年金を受給している期間である。調査時点のモンゴルでは、老齢年金の給付開始年齢は原則として男性60歳、女性55歳であったが、4人以上の子を出産した女性や危険業務に従事した男女には給付開始年齢の引き下げがあり、個人差が大きい (Delhiin Bank 2011: 18–19)。

居住地は、各季節にもっとも長く住んだ場所と定義し、これを「都市」(■で示す) または「牧畜地域」(○で示す) に分ける。すると、春・秋・冬にひとところで、夏に別のところで住む傾向がみられた。以下では、都市をウランバートル、エルデネト、ダルハンとし、牧畜地域をそれ以外のすべてとする。つまり、県・郡・行政区の中心地は牧畜地域に含むものとする。

以下、結果を世代ごとに示す。

3.1 第1世代 (1910年代生まれ)

第1世代の4人は1910年代に生まれ、調査時点では故人である。彼らのライフコースの概略は、(1) 子ども期を牧畜地域で過ごし、(2) ～ (3) 教育経験は不明であるが、(3) 中年期には牧畜地域で牧畜労働者として働き、(4) 定年後に都市に移住する、というものである。

1Aと1b夫婦はボガトの牧畜協同組合に所属し、組合のヒツジを専門に管理するヒツジ飼いとして賃金を得て生活していた。1Cと1d夫婦はヒシク・ウンドゥル郡の牧畜協同組合に属し、やはりヒツジ専門の牧畜労働者として働いた。

彼らは定年後に順次、子どものいるダルハンに移住した。その具体的な生活の内容は、都市に住居を確保することで寒さの厳しい冬季を楽に過ごし、夏季には牧畜地域にゲルを立てて自分の家畜の世話をするというものであった。つまり、老齢年金を経済基盤として、1年のうちの半分以上を都市の定住区で過ごす、季節的に牧畜地域に移動して牧畜も営むという、都市を本拠地とする遊動生活である。

3.2 第2世代 (60代)

第2世代は60代である。彼らは、(1) 牧畜地域で育ち、(2) 牧畜地域で初等・中等教育を終え、(3) 都市の大学で学び、(4) 中年期に都市で働き、(5) 定年退職後に牧畜地域に戻った。

2Iは1951年、ボガトの牧畜世帯に生まれた。小学校に入学してから3年生になるまで、ボガト郡の中心地「ボガト」の学校に、寮生活しながら通学した。寮の食事は肉中心で、ゆで肉だけを食べるメニューもあって満足だった。4年生になると、実家からより距離のあるボルガン県の中心地「ボルガン」の学校に進学した。学校に

は親がウマで連れて行ってくれて、7～10日間寮で生活し、寂しくなる頃に家に連れ帰ってもらえた。ボルガンで8年制学校を卒業した後、ウランバートルの技術大学に進学し、販売員コース（2年制）で学んだ。ウランバートルでの学生時代に今の夫2j（67歳、男性）と出会い、卒業後に20歳で長子30を出産した。

2jがダルハンで専門職に就くことになり、2Iもダルハンの国営商店の販売員として就職した。店は肉とウォッカの専門店だった。当時は商店はすべて国営で、販売員は商品を熟知し、労働者に何を供給するかを考えるのが仕事だった。

2jは1946年、ボルガン県ヒシク・ウンドゥル郡の牧畜世帯に生まれた。大学進学を機にウランバートルに移住し、地質技師の専門を身につけた。卒業後にダルハンで就職し、地質技師として長く働いた。後に、エルデネットに移住し、諸協会の会長や国家公務員としての自然保護官の職に就いた。

1993年、2Iは42歳で年金を受給し始めた。それまでに子どもを4人産み、20年間働いたので早く年金を受けられた⁵⁾。2人はエルデネットに移った頃から、夏には牧畜地域にゲルを立てて自分の家畜の世話をするようになっていた。

1998年、2I夫婦はエルデネットから牧畜地域に本拠地を移した。2000年には2jが年金受給年齢に達した。この年、2人はエルデネットに3部屋の古いアパートを買い、今も所有している。このアパートは居住用でなく、1週間に1回程度、日帰りで訪れて入浴と洗濯をするために利用している。筆者が見たところ家具はソファと洗濯機のみであり、内装がほぼなく、居間と浴室以外は荒れていた。

第2世代の2人は現在、牧畜地域を本拠地として、ウシを肉用に販売して得られる現金収入と年金を経済基盤として生活している。夫婦には子どもらが都市の物品を届けてくれることが多く、代わりに夫婦は子どもらに肉・牛乳・乳製品を与えている。

3.3 第3世代（30～40代）

第3世代は30～40代、いわばアラフォー世代である。2I夫婦の子どもら4人は(1)都市で育ち、(2)～(3)都市で教育を受けたが、(4)現在、4人のうち3人が都市で働いていて、1人が地方で牧畜に従事している。

彼らはダルハンで育ったが、全員、子ども期に牧畜経験をもつ。彼らの祖父母にあたる1Aと1b、1Cと1d、そしてそのキョウダイの世帯が牧畜地域で家畜を飼育していたことから、2I夫婦の子どもらは子ども期、そして学校期中の夏休みに牧畜地域の第1世代宅に滞在して、牧畜の仕事と家事を覚えた。この経験は、調査期間中に第4世代が実践していた季節的な居住地移動および牧畜経験と重複する内容である。

2I夫婦の子どもらは全員、ウランバートルの大学を卒業し、結婚し、子どもがい

る。彼らの配偶者は4人とも牧畜地域出身ではあるが、県の中心地などの定住区に住んでいたため常時、家畜に接していたわけではない。第3世代のうち、ウランバートル在住の6人は大学、IT企業、税務署などで働いている。3uは大学を卒業した2002年に、やはり大学を卒業したばかりの妻3Vとともに、2Iと2jが牧畜を営むボルガンに移住し、牧畜による自営業を始めた。ただし、3Vは子ども期・学校期に牧畜経験をもたない。彼女は県の中心地で育ち、学校期・大学期にはバレーボールの選手として夏休みは練習合宿に参加していた。彼女は結婚してはじめて牧畜の仕事を経験し、牧畜地域の生活を学んできた。

第3世代の4世帯はすべて家畜を所有している。家畜は主に親と弟夫婦に管理してもらっているが、子どもの夏休みには、家畜の搾乳や囲い入れの仕事をさせるために子どもらを行かせる。大学生などの年長の子どもは牧畜地域では大きな労働力になるが、本人には都市でアルバイトをして収入を得るという選択肢があるため、3Rは4aにお金を払って2Iらの家へ送っていた。3SはIT企業に勤めているが、6カ月前に4Eを出産して育児休暇を取得してから、第1子4dを連れて牧畜地域の実家に長期滞在している。3pは教員であるが、2012年にボガトの実家の夏営地と冬営地のあいだにセカンドハウスとしてのログハウスを3軒、建設した。ログハウスには家族や友人が集まって休暇を楽しんだり、ツーリストキャンプとして外国人観光客を宿泊させて副収入を得たりしている。

3.4 第4世代 (0～20代)

第4世代は0～20代の12人である。そのうち、都市に本拠地をもつ者が9人、牧畜地域に本拠地をもつ者が3人である。モンゴルでは、子どもは6～8歳のあいだに小学校に入学する。学校は9月に新学期を迎え、翌年5月までが1年間である。そして調査対象の第4世代は全員、ウランバートルの学校に通学している。しかしながら、彼らは3～22歳頃の約20年間にわたり、親の仕事の夏休みにかかわらず、自身の夏期休暇にあたる6月初旬から8月末まで、つまり1年の4分の1の期間、親元を離れて牧畜地域の祖父母などのゲルに住み込み、年長者の指導のもとで家畜の世話と家事を学んでいた。

4 夏季休暇中の移動実践

調査期間中、2Iの家族17人がボガトに集まっていた。世代別に人数をあげると、第2世代が2人、第3世代が5人、第4世代が10人である。その居住状況を図4に示した。第4世代のほとんどが牧畜地域に滞在しているが、4Wは2013年6月から外国に留学し、4Fは数学コースのある中学校への編入準備のためにウランバートルに

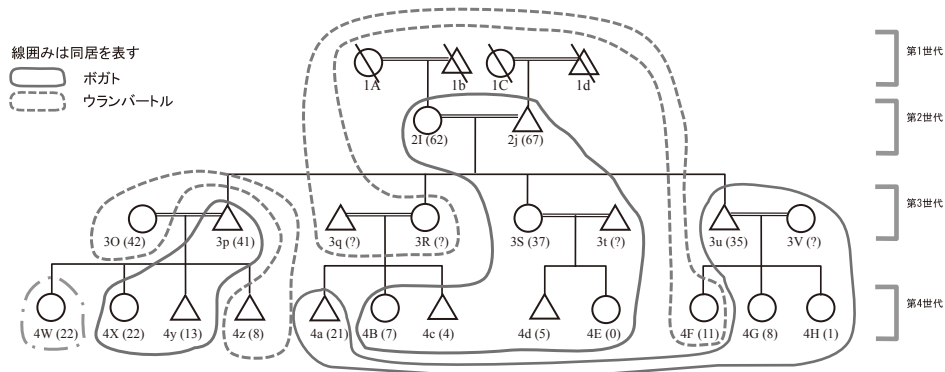


図4 2013年秋（8月末の観察期間）の居住状況

いた。4Fは学校のある期間は妹の4Gとともに3R家に寄宿している。2013年の6～8月には、図4でウランバートルにいる人がボガトに滞在したり、ボガトにいる人がウランバートルに滞在したり、大人、子どもにかかわらず人の移動が多く、数日単位で絶え間ない変化があったという。

2013年のボガトの夏営地には、2I夫婦と3u夫婦がそれぞれ移動式天幕を2つずつ立てていた。ひとつが「ゲル」とよばれるメインの住居で直径が6mあり、もうひとつは小さめで「イルー・ゲル」（余分のゲル）とよばれていた。2I家はゲルで睡眠・食事・接客などの家族生活と社会生活の大部分をおこない、イルー・ゲルではもっぱら乳製品の加工と食料の保存がおこなわれていた。3u家では、イルー・ゲルで食事・調理全般・家族の団らんをおこない、ゲルは睡眠と接客のためのみに使用されていた。

ボガトと都市の住人を含む17人は、これら2つのゲルと、3pのログハウスに分宿した。図示された人びとのほかに、2Iの姉のひ孫にあたるエルデネトから来た男児（9歳）と私が3uのゲルに宿泊し、3pの友人の息子（15歳）がログハウスに宿泊した。食事は2Iのゲルに寝泊まりする人びとは2I家で食べた。3u家に寝泊まりする人びととログハウスの人びとは主に3u家で食べるが、食事時に2I家にいた場合には2I家でも食べた。2I家の食事メニューは主に「汁のある食事」、3u家は「乾いた食事」であった（風戸 2012）。乾いた食事は炒め物、蒸し物、揚げ物などの手間のかかる料理であり、かつバラエティーが豊富で、若者が好むが、年寄りがこれを多く食べると「疲れる」「胃に悪い」という。汁のある食事は肉うどんか肉米汁に代表される簡単な料理であり、年寄りが好む。

ボガトの夏の生活は、都市から来る子どもたちの存在を前提として、住居と食事が用意されると同時に、彼らの労働力をあてにして、ウマの搾乳という労働力が多く必要な作業が組まれていた。しかしながら、子どもらは9月にはウランバートル

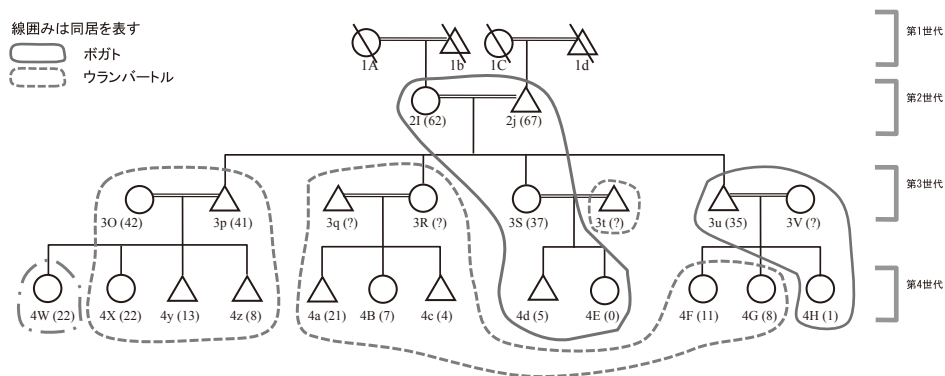


図5 2013年秋冬（9月～）の居住状況

の学校に戻っていく。毎年8月末には、モンゴルの飛行機国内線や長距離バスは都市に戻る子どもで混みあう。

2013年は9月1日が日曜日であったので、9月1日に移動する人びとが多かったようである。2I家からも9月1日に6人の子どもと私が、3pの運転する日本製のジープでウランバートルに移動した。実は筆者は、3pが子どもらを連れに行く車に便乗してボガトに行き、子どもらとともにウランバートルに戻ったのである。

9月1日以降の2I家の人びとの居住状況を図5に示した。第2世代では育児休暇中の3Sが就学前の子どもらとともにボガトに残り、第4世代では3uの娘たちが3R家に寄宿している。4Bと4Gは誕生日が数カ月ちがいの同い年で、学校では同級生である。

5 牧畜生活も都市生活も

以上の結果から次のことがいえる。聞き取りによれば、全世代が子ども期・学校期・大学期に牧畜地域で過ごした経験をもつ。実際に、第4世代が都市と牧畜地域のあいだで季節的に移動していたことから、第2～3世代の人びとが社会主義期にも同様な季節移動をしていたことが推察できた。モンゴルの夏休みは6～8月の3カ月と長く、これは1年の1/4の期間である。これを3～22歳の20年間おこなうとすれば、60カ月、つまり5年分の時間である。彼らは牧畜地域では祖父母やオジ・オバの家に住みこみ、これらの大人たちに加えて、キョウダイやイトコなどを含む多くの年長者の指導のもとで家畜の世話と家事をはじめとした牧畜地域での生活技術を総合的に学ぶ。

ライフコースと移動の関係に注目すると、牧畜地域の遊牧民は就学・就労・退職をきっかけとして都市生活者に転換していた。反対に、都市の学生や労働者は就労

表2 牧畜地域を居住地として選好する度合い

世代	人数	(1) 子ども期		(2) 学校期		(3) 大学期		(4) 中年期		(5) 定年後		合計
		春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	春・秋・冬	夏	
第1世代	4	12	4	12	4	0	0	12	4	-12	12	48
第2世代	2	6	2	6	2	-6	-6	-6	2	6	6	20
第3世代	8	-6	7	-6	6	-21	6	-12	8	0	0	-18
第4世代	12	-18	12	-24	9	-9	3	-6	0	0	0	-33
合計	26	-6	25	-12	21	-36	3	-12	14	-6	18	17
期間合計		19		9		-33		2		12		

や退職を機に遊牧セクターに移動していた。この2つのコースからいえるのは、この家族のすべての人が牧畜生活と都市生活を経験しているということである。都市生活の準備としては、現代のモンゴル人は各種の学校や軍隊で数年間のフォーマルな近代教育を受けている。牧畜生活の準備としては、人びとは子ども期・学校期などに牧畜地域に長時間滞在して、親族からインフォーマルな教育を受けている。

2Iの家族の居住地選択の傾向を分析するために、彼らが牧畜地域を居住地として選好する度合いを数値化して示した(表2)。牧畜地域に住んだ期間は加点、都市および外国に住んだ期間は減点、不明およびデータなしは0とし、春・秋・冬の9カ月を3点、夏の3カ月を1点とした。各人生段階の年数には個人差があるので数値は傾向のめやすにとどまるが、表2から次のことがいえるだろう。各世代を比較すると、第1世代が48点と牧畜地域を大きく選好していたといえるのに対して、世代が下がるごとに点数は減り、第4世代は最小の-33と都市を選好していることがうかがわれる。人生段階を比較すると、(1) 子ども期、(2) 学校期、(5) 定年後に点数が大きく、(3) 大学期と(4) 中年期は点数が小さい。季節で比べると、春・秋・冬の合計は-72、夏の合計は81であり、夏にはその他の季節の約2倍、牧畜地域が選好されているといえる。

6 おわりに

本稿は、2Iの家族26人の個人史と4世代の100年間にわたる家族史をひもときながら、彼らの居住地選択のあり方を検討してきた。彼らは、人生のさまざまな段階において牧畜地域と都市の両方で生活の経験を積んでいた。そしてその重層的な経験にもとづき、草原でも都市でも生きていくことができる多面的な生活技能を身につけていた。この背景にあるのは、モンゴルの遊牧民が社会主義体制下でも牧畜とほかの生計手段を臨機応変に組み合わせて、草原にとどまらない広範な地域に居住地を移し、状況依存的に仕事を選択してきた歴史である(風戸 2009: 236)。以上か

ら、20世紀のモンゴル人のライフコースとファミリー・ヒストリーは草原と都市を往還するものであることが示された。

謝辞

本研究はJSPS科研費90452292「生産現場における人とモノの関係性にみる社会主義経験の多様性と普遍性」(研究代表：風戸真理)、平成23年度～平成26年度(若手B)の助成を受けたものです。この調査は、2I氏とそのご家族およびバットゥル氏のご協力により実現しました。みなさまに心から感謝いたします。

参考文献

Bulgan aimag

2013 *Alban esny veb sait* (<http://www.bulgan.gov.mn/organ/1201090003/>).

Delhiin Bank

2011 *Mongol Uls, Tetgeveriin bodlogyn shinechleliin huvilbaruud, Tailangiin dugaar: 68526-MN*.

国立社会保障・人口問題研究所

2013「人口統計資料集(2013)」(<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2013.asp?chap=1&title1=%87T%81D%90I%8C%FB%82%A8%82%E6%82%D1%90I%8C%FB%91%9D%89%C1%97%A6>).

風戸真理

1999「遊牧民と自然と家畜～遊動と家畜管理～」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社, pp. 21-50.

2002「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力：ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に」『リトルワールド研究報告』18：49-77.

2006a「商品世界からこぼれ出る家畜—社会主義および市場経済化期のモンゴル国における家畜の個性と意味—」『人文学報』93：25-55.

2006b「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち—モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と群れの管理—」『アジア・アフリカ地域研究』6(1)：1-43.

2009『現代モンゴル遊牧民の民族誌』京都：世界思想社.

2012「モンゴル遊牧民の食事：世界のくらしと文化—モンゴル国(3)」『人権と部落問題』830(6月号)：62-67.

2013 「ポスト社会主義国における職業と人生選択：カザフスタンのある朝鮮人の事例より」『神戸山手大学紀要』14：97-107.

小長谷有紀編

2003 「モンゴル国における20世紀」『国立民族学博物館調査報告』41：3-6.

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編

1988 [1969] - 1, 1988 [1969] - 2 『モンゴル史1・2』(田中克彦監修, 二木博史, 今泉博, 岡田和行訳) 東京：恒文社. (BNMAU-yn ShUA-iin Tuuhen Hureelen, 1969 *Bugd Nairamdal Mongol Ard Ulsyn Tuuh. Gutgaar Boti, Nen Shine Ue.*)

Mongol Ulsyn eronhiilogchiin tamgyn gazar, Shinjileh uhaany akademiin hariyaa

2011 *Undesnii hogjiliin hureelen, Hun aмыn nutagshilt, hodolmoriin zah zeeliin sudalгаа, toслиin дугаар: BS-11/05, Undesnii hogjiliin hureelengiin dergedeh sudlaachdyn bagiin etssiin tailan*, Ulaanbaatar.

娜仁格日勒 (Narangerel)

2010 「1960～1980年代におけるモンゴル人民軍の生活実態—20世紀のモンゴル社会を解読する1つの手がかり—」『国立民族学博物館研究報告』35(1)：139-230.

Niisleliin zasag dargyn huregjuulegch agentlag, arhivyn gazar

2013 *Ulaanbaatar hotyn hun am, gazar nutgiin uusel hogjiliig onoogiinhtei haritsuulsan tovc medeeler* (http://www.archive.ub.gov.mn/index.php?option=com_content&view=article&id=1243:2012-08-15-08-57-19&catid=60:2010-09-17-18-24-52&Itemid=311).

日光市

2013 「市のデータ」(<http://www.city.nikko.lg.jp/seisaku/profile/data/index.html>).

滝口良

2013 「つぎはぎの所有：社会主義体制下のモンゴルの都市部における『生の財産』と居住空間の構成」『北海道民族学』9：1-14.

Tangad, D

1986 Hool und. In Mongol Ulsyn shinjleh uhaany akademi Tuuhiin hureelen (ed.), *Mongol Ulsyn ugsaatny zui*, Ulaanbaatar.

東京都の統計

2013 「東京都統計年鑑平成23年／人口・世帯」(<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/tnenkan/2011/tn11q3i002.htm>).

Wikipedia

2013 「順位・規模法則」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/順位・規模法則>).

2013 「モンゴル人民共和国」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/モンゴル人民共和国>).

2013 “Эрдэнэт” (<http://mn.wikipedia.org/wiki/Эрдэнэт>).

Zasag dargyn dergedeh statistikiin gazar

2012 Hun am, oron suutsny 2010 ony ulsyn toollogyn negdesen dun: Ulaanbaatar hot, Ulaanbaatar.

註

-
- 1) 日本における1935年から2011年にかけての総人口の増加率は1.8倍である（国立社会保障・人口問題研究所 2013）。
 - 2) 東京都の1910年から2012年の人口増加率は4.9倍である（東京都の統計（2013））。
 - 3) 日本国内の人口約9万人の市町村にはたとえば栃木県日光市（2012年現在、8万7000人）がある（日光市 2013）。
 - 4) ウランバートルの首位性指数（プライマシィ指数）は、ウランバートルの人口をエルデネットの人口で割って算出した。なお東京都区部の首位性指数は、2011年現在2.429である（Wikipedia | 順位・規模法則 2013）。
 - 5) 現在の年金受給額は、2lが1カ月200,000tog.（約12,500円）、2jが300,000tog.、夫婦合計500,000tog.（約31,250円）と物価に比して少額である。なお、ウランバートル市内の両替所での交換レートは2013年8月18日現在、1円 = 16tog.である。

アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書

編集委員長：嶋田 義仁（名古屋大学）

編集委員：ハマドゥ・アダマ（ガウンデレ大学）

池谷 和信（国立民族学博物館・総合研究大学院大学）

石山 俊（総合地球環境学研究所）

今村 薫（名古屋学院大学）

モハメッド・ウチャ（アドラール大学）

大野 旭＝楊 海英（静岡大学）

坂田 隆（石巻専修大学畜産学部）

ウスビ・サコ（京都精華大学）

サンバ・ジャーロ（バマコ大学）

鷹木 恵子（桜美林大学）

中川原 育子（名古屋大学）

縄田 浩志（総合地球環境学研究所）

平田 昌弘（帯広畜産大学）

ボルジギン・ブレンサイン（滋賀県立大学）

星野 仏方（酪農学園大学）

ピエトロ・ラウレアーノ（伝統地域知識研究所）

事務局長：中村 亮

副事務局長：児玉 香菜子

局員：ウスマヌ・アダマ 鈴木 良幸 松平 勇二

アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 8—

『中央ユーラシアにおける牧畜文明の変遷と社会主義』

編者：楊 海英

刊行：平成26年3月30日

発行：アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会（代表 嶋田義仁）

名古屋大学大学院文学研究科 比較人文学研究室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel 052-789-5697 E-mail : jsysima@lit.nagoya-u.ac.jp

Editor: Yang Haiying

Publishing : Association for Afro-Eurasian Inner Dry Land Civilization Studies (Chairman: Shimada Yoshihito)

Comparative Studies in Social and Human Sciences,

Graduate School of Letters, Nagoya University

Furocho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

E-mail : jsysima@lit.nagoya-u.ac.jp

The 30th March 2014

平成24年度科学研究費補助金による出版

基盤研究(S) (課題番号 21221011)

課題名：牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究

研究代表者：嶋田義仁 名古屋大学文学研究科 教授

afro-eurasian inner dry land civilization collection 8

Changing Nomadic Civilization and Socialism in Central Asia

edited by

Yang Haiying

Comparative Studies of Humanities and Social Sciences
Graduate School of Letters, Nagoya University